定川掛制度に関する一考察
東京市史稿を読む

A Study on Relative to the Joukawagakari Seido

by Tetuaki SHINODA and Tutomu NAKAO

概要
1790（寛政2年）3月21日町奉行所管の御用用橋定請負人が追放された。これは1734（享保19年）3月4日以来の定請負制度が廃止されたことになり、代わって町奉行所と勘定奉行所の両がにより御用用橋の新規及び修復工事が進められることとなった。次いで同7年定川掛制度が発足している。この制度は従来の定請負制から直営体制に転換されるものであり、直営主義の勘定所が土木技術行政を一元的に掌管したことを意味するものと見られる。

本稿はこの成立過程を検討しようとするものである。

1. はじめに

1732（享保17年）8月「公役金ヲ以テ府内橋梁ノ経費＝充ツ」という申渡があり、年間千五百両の公役金にて府内橋梁の新規及び修復工事が行われていた。御用用橋は、1732（享保17年）には千両、1733（享保18年）には千百両余が計上されているが、1734（享保19年）3月白子屋敷及び棟木屋敷の二町が町方御用用橋を86橋、その他の46橋の計126橋を年間八百両で新規修復一式を定請している。1738（元文3年）にはry橋を加え、127橋になり定請負金額が千両に増額されている。この定請負制度は橋梁に限らず、川渡い水防業務等に及んでいた。

この定請負制度は直営の職員の確保、非職人化する組織の形態を防止することができる制度であり、二人の役割で橋梁の技術管理を行っていたことをもって、合理的な制度であったことも考えられる。

ところが1790（寛政2年）3月21日定請負人の追放が行われた。

三月二十一日 〇寛政二年（西暦一七九〇年）
御用橋定請負役儀取放ヲ枠ヲ、町方勘定ヲ
両掛リ直営請トナルヲリ町方ニ申渡アリ

この御用用橋請負制停止の理由は「是らを方次請負量
在候処、請請遅滞等致し不行橋役も有之ヲ付、定請負之
儀取放被仰付候」というものであった。

ついて出された申渡には

Keword: 江戸寛政期、定請負人、土木技術行政

正会員 北海道建設工学専門学校
正会員 北海道学園大学講師

* 〒065-0005 札幌市東区北5条東8丁目1-35
高野善次郎・小宮善右衛門・宮邇又四郎の5名であった。
中州町新地築立は大成功し、大歓楽街となり、その盛況はいくつかの図絵等に伝えられている。
ところが、1786（天明6）年7月に隅田川を襲った大洪水は、隅田川両岸の住宅地に大きな被害を与えた。この原因が中州町の築立にあるという理由により、撤去されることになった。

三月 〇天明七年（西暦一七八七年）三条富永町、水行ノ妨げトナルタメ、六年後ノ拝領
ゲノ積リ、老中水野出羽守ヨリ申渡シアリ

1789（寛政元）年10月17日突如として中州町築出撤去のため御用懸が任命されている。

御用懸
1789（寛政元）年十月十七日 大川筋凌御普請御用

久世月後守（勘定奉行）・坂部十郎右衛門（御日付）
同年十月十九日 居史任命
御勘定組頭；佐久間尚八・今村五右衛門
井上岩次郎

支配懸定：富田九八郎
御勘定：坂野善六郎・谷田久太郎
重田又兵衛

同格見習：若林藤八郎

同年十月二十五日 大川筋凌御普請御手伝
立花近治将監・阿部伊勢守・秋元但馬守
同年十月二十六日 大川凌二付錢通務御助

同年十一月十三日 大川筋普請引請人

権橋切組方大工築 findet；関田治助
藤田星清右衛門

以上の御用懸からみて、勘定所主体でお手伝い大名の資金提供により、1789（寛政2）年にあたり、中州町の撤去が実施されている。
この中州町撤去は、過去の中州町築立の計画自体を批判し、撤去させるという勘定所の伝統的仕法によるもので行われたと考えられる。

さらに市中の噂話を取り録した「よしの冊子」にはつぎの記事を見ることができる。

中州町築立は、この寄進を埋め立てて1771（明和8）年6月に起工し、翌1772（安永元）年十月に竣工している。
この築立は江戸戸塚馬町の役職が年々役務が増加するが、助郷制度が無いため、馬場町の財政が困窮するのを防ぐための助成策であり、中州町新地の地代金を探負工事費と馬場町への助成金にあてようとするものであった。

請負人は江戸戸塚馬町の築馬役込勘解由・吉澤主計

八十八 自西〇寛政元〇年 十月廿九日〇中略
一、川流御ぎ候々二付、老少ニ不限出候で土地を選び、いれども難あり候由。一人
ニ付錢両二百銖、米谷卅文を被下候由。其ニ御覆議ニやと、有がたがり候由。
其ニ二等ニ成候ハ、商人も多く奉公人ともや有之とのさたのよし。
一、戊正月の詔。川流、甚八八田合流＝
て、米生之七合之割＝いたし候由。江
戸の人足八中々左様＝てへ承知不致候よし、
いづれ＝も百文＝ありり不甲斐にて、弁
当さし引くらしかった出来候候由。甚八不取
計＝付、右仕法改正上より被仰出、よろし
く相成候よしのさた。1）

また中州町撤去は、松平定信による「寬政の改革」の
一端として実施されたとされているが、正確さを欠く表
現である。

天明七年三月1）
甲斐守殿え
山村信濃守
撤者懸三保永年町地所之儀、取計方相伺候
＝付、貴様御懸懸＝て相成候同所南
方石垣周百五拾四坪餘之場所、撤者方＝
御引渡被成候ても差支無之故之段、先達で
及御懸合候巡、右所計残り候では、築
同様＝相成候間、伺之通被仰渡候＝、其節
右地方御引渡可被成旨御附札を以被仰開候
＝付、其旨伺え認申上候。然ら、撤者
懸之地所、先是迄之通五ケ年差置、六ケ年
目＝至、彌水行之階＝相成候＝、其節
揚之積出羽守殿被仰渡候、依＝御巡甲候。
末三月

この文書は天明七年三月となっており、町奉行山村
信濃守から同役曲源甲斐守に宛てたものである。曲源甲
斐守が西条留守庁に転じる２ヶ月前のことである。土地
の引き渡しに関する確認を求めているものである。内容
は判然としない部分もあるが、文中に「先是迄之通五ケ
年差置、六ケ年目＝至、彌水行之階＝相成候＝、其節
揚之積出羽守殿被仰渡候＝、依＝御巡甲候」という、明らかに撤去計画
が決定していることを示している。これによって旧沼政
権の末期に計画が決定しており、松平定信がそれを実施
に移したということになる。

(2) 筑立の撤去と水塚建設
中州町築立の撤去された土は今日で言う洪水時の一避
難場所である水塚の築立に転用され、5ヶ所の建設を松平
越中守が寺社奉行へ命じている。

寛政元年十月10）
寺社奉行
此度大川通御普請諸役士を以、隅田村木母寺
、今戸町八幡社地、本所向院、大徳院、
深川霊雲院域内明地、近辺水難之節退所
＝相成候課、水塚築立被仰付候間、右寺社
＝申渡、懸り御勘定奉行申請、可被取計候。

この水塚の規模をみると、水災避難の機能は十分に果
たしていたものと考えられる。

さらに、戦後は洪水管内の築立の埋め立て、三重築の
築立にも流用されているが、旧堰に土を嵩置したという
記録はない。戦国以前河川氾濫浸に進出した耕地の水防
施設と考えられる堤防の変遷のなかで、特に戦後の新
田開発により生じる新規の堤防と既存の堤防をめぐる紛
争において、新規の堤防高は既存の堤防高と同一となる
ことはなく、既存の堤防より低く洗護が設けられ、乘越
堤の名に示すこと一定の水位になると、新田は洗護を
受け入れなければならないのである。このように仕
法は代官所に調停人紛争当事者らが長い期間をかけて作り
上げた経験則であり、宝暦期によく成立したと考え
られる。この経験則は既存権の尊重に基づくのである。

また、幕府勘定所の旧堰と新規築立に対する基本姿勢
は、論所取扱則＝「堤川除井堰用混水道橋普請田畑新開
場水行故按等取材類」10）によると、後新の堤防を設上げ
したことによって、既設の堤防が決壊した場合には、新
堰の設置土を削り取る。また洗水の原因となる新堰の土
地は地方台帳に記載することなく、元の流用場に戻せ
、というものであった。

図-2 今戸町八幡社水塚
（東京都史蹟産業篇第三十三より）

論所取扱則10）
堤川除井堰用混水道橋普請田畑新開場水行
故按等取材類
一、當時用水不引といふとも古来より之組
合離候事禁也
（中略）
一、堤重置土水行之階ニ成ルニおってハ
削取之也
（中略）
一、水行之階成候地面水帳ニ不書載新開之
類ハ聞取撰重作場たるへし
引書 ○地政役心得書

旧堰に嵩置すれば水塚は不要であるわけで、旧堰の嵩
置は論外のことであったと考えられる。
中州町築立の撤去はこの「論所取扱則」にしたがい行われたものとも考えられる。

3. 定請負制度の廃止
中州町の撤去工事が進められている途中において、町奉行所の定請負人の追放が、次々に行われた。これは中州町撤去工事は勘定所主導で施工されており、従来の町奉行所主導の定請負制度を否定する意図を示すためかと思われる。

江戸向本所深川橋々之義、是迄白子屋築七
菱木屋喜兵衛受領在候職、普請隠謀等致
シ不行届義も有之候ニ定、定受負之儀取放
可被申候、右橋々之義はクリ理請負ニ被仰
付候間、可被取放候。尤御勘定奉行在味役
等川々定挂り之分取扱候様ニ被仰付候間可
被談候

こうして、1790（寬政2）年3月21日白子屋築と、菱
木屋喜兵衛は1734（享保19）年以降の定請負人の座を追
われる。白子屋築たちちは同年2月に凌草今戸橋・同
新島越橋等を金札三両式で落成し、請負契約を行っ
たばかりであり、まさに寝耳の水という事態に驚いたこ
とと思われる。この工事は勘定所主導の使用人権隠計
組大工棟梁岡田利助が引き継いでいる。

このような追放は植栄の定請負人だけではなく、1790
（寬政2）年4月2日には、江戸川常滑らが「浪費宜
しからず候奉行」という理由で追放されている。

四月二日○宽政二年（丙辰一九〇年）江戸
川神田川波行不届ノニ、常波請負人ヲ
取放ス、武家方町方支配毎ニ管理センズ

この常滑は1790（延享3）年以降の請負であるが、
追放は不正によるものではなく、浪費不届という理由
であり、同時に浪滑の財源になっている助成地も召集
されている。

この幾つかの事例から、勘定所が町奉行所の権限下に
あった土木工事の自らの権限下に納め、中央支配の一元
化を果たすために行い、さらに1790（寬政2）年7月
17日定川掛制度を発足させ、法制度化によって勘定所支
配を不動のものとしたと考えられる。

定川掛制度発足後の町奉行所の土木工事規制は、限
定された金額の範囲内での維持修理を行うのみになっている。

寛政五年癸丑十月三日
丑十月丙三日池田筑後守侍中村又蔵候御渡
本多脇正大勢殿渡渡被成松滿吉付写
本所深川御用筆墨紙人足賀、下水橋修復

入用、是迄常滑受益者之年加役に仕来候
處、其共向後壹壹歳年御用金五千八百両
相互、右極高より不相增様可被取計候、尤
両國橋頭更 Colon 川府共修復等之儀、是其々
可被相候間、且見分等之節出候御用船
之儀、互來壹年百廿拾牌に相接、右之
内をも船數相隣隠様取計、御用之々川
船役所より受取之様、是迄有東候御用舟
は川舟方へ可被引渡候、儀隠細之儀は柳生
主離正、村垣左丈方へ懸合、御金受取方之
儀は御勘定奉行可被談候

＜下略＞

この記録では、町奉行所管の土木工事は年額58両の維
持補修にとどまっている。

4. 定川掛制度確立までの過程
（1784（天明4）年豊川浦にみる町奉行所と勘定奉
行所の関係）

豊川は1705（宝永2）年崩れされ、1730（享保15）年
と1757（宝暦7）年の2度部分的廃止工事が行われてい
るが、80年経過した1784（天明4）年には、新間地の舟
運が困難となり、廃止が急務となった。

この工事は1784（天明4）年4月に22名の応札者を得
て競争入札を行っているが、予算超過により不調に終わ
り後日仕様を変更し、再度入札を行い豊柳原町町家
主伊兵衛他1名が請負、11月に竣工している。

天明四年四月
本所豊川浦御昔諸目論見之儀＝付上申候書付
鷹佐次右衛門（町奉行与力）
仁杉右衛門（同 上）

本所豊川浦御昔諸目論見之儀被仰渡候＝付
、川勝見分仕候書、左之通り御座候。

一、御勘定方より来候目論見候＝、一ツ
目より逆井途之間延長二千六百四間
＝御座候。私共見分仕候書、延長二千
二百間余之ヲ、御勘定方より間數と
見合候得是、六拾間余之相違＝相成申
候。

＜中略＞

前書申上候通リ御座候、則見分細圖仕様帳
両道役共積書奉入御座候。以上。

辰 〇天明四年 四月

天明四年四月十五日
本所豊川浦御昔諸目論見入札被仕候儀申上候書付
鷹佐次右衛門（町奉行与力）
仁杉右衛門（同 上）

本所豊川浦御昔諸目論見入札、私とも立合彼候
處、汐底入水下米五寸波之方、左之通り
二御狩候。

落札
一、金五千六百三拾六兩貳銭柒文
本所柳原壹町目 家主 伊兵衛
深川元町兵庫町 伊兵衛

＜中略＞
一、金五千六百拾八両
本所道役 清水八郎兵衛
宗城善兵衛

＜中略＞
都合拾貳両。
右之通り御座候。以上。

四月 ○天明四年 十五日
橋佐次右衛門
仁杉幸右衛門

この史料には、入札に於る決済工事の積算をしていた道役が、応札者として参加していることが記されている。

この事実は何とも理解し難く、入札者を意図的に多くする為の工作と解釈することはできる。また、前年に見られる「御御奉方より來候目論見候＝は」
という箇所は、明らかに勘定所の介入を意味していると思われる。自主財源に苦しんだ町奉行所側が勘定所財源
に依存した為でも想像されるのである。この刻印の決済工事は町奉行所の主導で工事が実施されている。時町
奉行は曲済甲斐守であった。

この時期においては、町奉行所と勘定所の関係は小康
状態にあったように見える。

5. 定期御国の発足
定倉御奉行後町奉行所と勘定奉行所との両掛によ
る新制度の記録は、1790（寛政2）年4月13日付の江戸
川橋の修理工事として残されている。

江戸川橋仮橋破損所取締井来橋橋急破損
締之儀申上候書付
書面同じ通仕、以米橋橋損我之義私
共両御役所え申出次第、即刻御詳請
役差違見定之上、取締之義速速無之
様取計可申上旨被仰覆奉承候。
戊 ○寛政二年 四月十三日
池田筑後守
久世丹後守
高尾塚十郎
佐久間甚八

このように試行期を経て、1790（寛政2）年7月17日
定川橋制度が発足している。

七月十七日 ○寛政二年（西暦一七九〇年）

橋々定請負制廃止ニヨリ定川掛リヲ設置ス

「寛政二年戊午七月十七日

奈良屋市右衛門殿内外小口万文名主被申
一、江戸向寄井本所深川橋々ヲ、定川懸ニ
て序々ニ見置被申差候候間、若見相之
節、橋々皆著之町役人え相尋候品も
可有之候ハ、隔出可申立事。

為心得申付候

右之通為心得可申付置管町奉行所より
被御候候間、支配町々々申間、橋々有
之所々募辞町々町役人共相心得可罷在
候。此旨組合不撤輸早々可被申後事。

但、橋掛り名前別紙之通ニ候。

橋御掛り

池田筑後守殿
久世丹後守殿
高尾塚十郎殿
佐久間甚八殿

支配勘定候見
若林篭八郎
御置請役
早川町三郎
御置請役
直井弥太夫
神谷貞一郎

本所方
佐野五郎左衛門

江戸向
吉田百助

本所方
服部仁左衛門

江戸向
谷村源次郎

上記の組織を見ると、勘定奉行所主導が読みとれるが、
定請負人が追放された1790（寛政2）年3月を境に、
町奉行所と勘定奉行所の両者が今後の取り扱いについて
協議を行っている。

一、貴殿御御＝則て拝り与力御申付候間、
橋々合見見之積可成旨知承候。
立合と申候てハ主客と相分り候抜＝
付、心得も遠可申也、此度両候り被
仰付候候、諸事御考意＝打合、皆は町
方取扱之儀、是退御勘定方＝て不相分
筋は重々御取計、御入用即等々、町方
御役所＝て御取扱之義＝、重＝御勘
定方＝て取計候積＝可致＝申合、諸伺
取調可申承候間、右之心得御組掛えも
御申渡置之有之候。

町奉行所分担：是退御勘定方＝て不相分筋は重々御取
計

勘定所分担：御入用即等々、町方御役所＝て取計候
之義＝、重＝御勘定方＝て取計候積
可致

とあり、さらに設計施工については

- 337 -
と定めている。橋梁検査とは検査走行下の橋梁大工検査岡田治助のことである。
また、事務細則として

右は差掛候義二付、検査等申付、従来無差
支検取差候検申付候。以来右体橋々井板橋
破損取替候儀方より申立候簡、御答請役
見分、為御入用金拾前後以上之分は積算相補
相同、拾前以上之分は従来無差支検取訪
、御末申上置、御入用是追え一等三等申し
、御金為請取候補可歩存候、依之奉伺候
以上。 **

と示している。
このような、組織や、協議の内容、設計施工ついての
定法、また御入用金に関する細則等から見て、町奉行所
管の土木行政を包括し、勘定所が定川掛制度によって一
元支配を果たした見ることが出来る。

6. むすび
　幕府財政の経費節減の一貫として府内における諸負制
度を見直し、直営体制に変更すべき、勘定所と町奉行所
との争いのなかに定諸負人の追放、定川掛制度の成立等
があり、結果は食政改革の恩澤に乗じた勘定所方が土木
技術行政の一元化に成功している。この事例は江戸期
における画期的な行政改革ということができる。
　しかし、町奉行所の組織を直営体制に改める努力は全
くなされていない。さらに道府のような貴重な組織も何
等充実整備が計られることも少なく放置されていた。
　また勘定所自体が、幕末の砕港建設など増大する需要
に対し、諸負制度に転換させざるを得なかったのである。
　いずれにせよ、近世という社会構造の端んだこの事件
は、簡単な外式で割り切れない複雑な要素が多くからん
でいると考えられる。
　今後新史料を発掘し究明を加えたい。
　おわりに、中州の現在について前江東治水事務所長荻
原宏氏のご教示をいただいた。ここに記して謝辞とする。

【参考文献】

(1) 東京市史稿　橋梁篇第二 p849
(2) 産業篇三十四 p145
(3) 産業篇三十四 p147
(4) 産業篇三十四 p321
(5) 産業篇三十四 p990
(6) 産業篇二十三 p245-246
(7) 産業篇二十三 p518
(8) 産業篇三十 p726
(9) 市街篇三十 p587-588
(10) 産業篇三十三 p401
(11) 産業篇三十三 p422
(12) 産業篇三十三 p382-383

「随筆百花苑第九巻」よしの冊子十一　中央公論社

(13) 産業篇三十 p727
(14) 産業篇三十三 p373
(15) 徳川禁令考後撰第一帙 p520-521
(16) 東京市史稿　産業篇三十四 p148
(17) 産業篇三十三 p273
(18) 日本財政経済史料巻九 p1044-1045
(19) 東京市史稿　市街篇二十九 p701-702
(20) 市街篇二十 p702-705
(21) 産業篇三十四 p321-322
(22) 産業篇三十四 p435-436
(23) 産業篇三十四 p154
(24) 産業篇三十四 p154
(25) 産業篇三十四 p322